7月の郵便・荷物

「ゆうパック」22％増と好調継続

日本郵便（本社・東京都千代田区、横山邦男社長）の7月の郵便・荷物実績は総計で前年同月比2・1％減の15億9974万7千通（個）となった。郵便は6月から実施した料金値上げの影響もあり減少したが、荷物はゆうパックが22・1％の大幅増になるなど好調が続いている。7月の平日日数は前年と同じ20日。

郵便物の実績は4・0％減の12億5405万3千通（個）で、うち内国郵便は4・1％減の12億5076万7千通。第1種は5・3％減、第2種は0・6％減。また、国際郵便（差立）は4・3％増の3288万5千通で、うち小包が1・1％減の30万7千個、国際スピード郵便（EMS）が6・0％減の109万7千通。

荷物は5・5％増の3億4569万4千個（冊）となった。内訳はゆうパックが22・1％増の7693万6千個で、ゆうメールが1・5％増の2億6875万8千冊。ゆうパックの伸びは昨年10月からゆうパケットの実績を含める集計方法に変更したことが寄与している（ゆうパケットの7月実績は77・0％増の2053万7千個）。

なお、今期累計（4～7月）は、郵便・荷物総計で前年同期比1・6％減の65億4956万8千通（個）。このうち荷物は6・1％増の14億22万4千個（冊）で、ゆうパックが24・2％増の2億6366万6千個、ゆうメールが2・6％増の11億3655万8千冊。ゆうパックのうちゆうパケットは81・4％増の7832万7千個（内数）。■

エスコット

ヒアリ、輸送経路上防除を提言

ベイト剤のコンテナ内設置を推奨

（写真）

NPO法人のエスコット（藤本治生理事長）はヒアリ対策として、輸送経路上での防除を提言した。とくに輸入した製品にヒアリが付着している場合、コンテナの返却先が内陸デポなど港以外の時には、「最も合理的かつ効果的」とし、ベイト剤のコンテナ内での設置を推奨している。

一般に輸入でのコンテナ輸送は、港で陸揚げされたコンテナはそのまま内陸部のデバンニング場所に直送される。ヒアリの拡散可能性としては、「輸入した製品に付着して上陸する」、「コンテナ内部に残り、デバンニング直後に発見される」、「コンテナ内部に残り、港に空コンテナとして返却され発見される」のいずれかが考えられる。

ただ、空コンテナの返却先は、バンプール、インランドデポのほか、コンテナのラウンドユースを行う場合は別の輸出者に渡されることもある。また、ヨシズ、竹籌のように形状が複雑な製品、パレット上にカートンが重なりラップで固定されている輸入貨物、また、木製パレットなどを使っている場合もヒアリの発見は非常に難しい。

夜間にデバンニングする場合、小さめで黒っぽいヒアリだと目視では発見しにくく、検査に時間をかけすぎるとドライバーを待たせなければならないなど労働時間の問題が生じる可能性がある。このようなケースに対応するには、〝水際対策〟には限界があり、輸送経路途中での防除対策の有効性を指摘している。